

信州大学 教育学部 同窓会報

創立30周年特大号

信州大学教育学部同窓会報
【第31号】

発行人 土屋 聖 史
事務局 長野市西長野6ノロ
信州大学教育学部内
TEL・FAX (026)238-4370



同窓会創立三十周年を迎えて

同窓会長 土屋 聖 史

いよいよ、信州大学教育学部同窓会は、今年八月十一日に創立三十周年を迎えます。昭和六十三年八月十一日に、信濃教育会講堂にて第一回通常総会が開催されたことにちなんで、曜日には関係なく、毎年八月十一日に通常総会を積み重ね、三十年の年月が経ちました。昨年からは、同日が「山の日」として国民の祝日となりましたが、山の日、山国、長野県、信州大学、教育学部同窓会の誕生日と見えない糸でつながっている気がします。山の日は、「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」ことを趣旨に制定されましたが、今後、八月十一日は我々、教育学部卒業生にとっては「母校（同窓会）に親しむ機会を得て、母校（同窓会）の恩恵に感謝する」日になってくれればと期待しています。

さて、これまで同窓会創立三十周年をいかに迎えたらいのか、幹事会や理事会等で繰り返し検討して参りました。検討を始めた頃は、五十周年というのが大きな区切りの年であり、三十周年はそれ程大々的には扱わずに、関係する諸先輩たちをお招きして、簡単な記念式典を行う程度に留めようと考えておりました。

そんな中、平成二十六年に長野北部地震が発生し、北校

舎（N館）の北側にあるレンガ造りの書庫が、内部を中心に大きな被害を受けました。私にとって、その建物は「在学中に、上の道路から見たことがあったかも……程度のものでしたが、実は、そのレンガ造りの倉庫は、明治二十八年に長野県庁舎の書籍庫として建設され、明治四十四年に長野師範学校（現信州大学教育学部）が譲り受けて保存してきた建物であり、国有形登録文化財に指定されている、貴重な建物でありました。教育学部としては、今後、この建物の耐震工事を、その内部も修繕していかねばならなくなりました。そんな状況の中で行われた幹事会において、「学部が困っている。同窓会としても何とか支援できないか。」あのレンガ倉庫を修繕して、同窓会館にできないか。」等の意見が出されました。「同窓会館の設立」は同窓会創立当時の願いではありませんでしたが、新たな建物を建てるだけの予算は無く、諦めていました。しかし、既存の建物を修繕して、同窓会館にしていくことは可能かもしれない……。

それから、同窓会館の設立の可能性について、検討が始まりました。国有形登録文化財に指定されている建物なので、外見はそのままに保存しなくてはいいけないが、内部について

は手を加えてもよいこと、大学の所有物であり同窓会が所有することはできないが、修繕した建物を大学に寄贈し、同窓会館として併用させてもらうことは可能である等のが分かってきました。また、そのレンガ造りの倉庫を学部のシンボルとして幅広く活用していきたいという学部の願いも、この事業を推進する後押しとなりました。その後、同窓会館整備委員会を立ち上げ、更に検討を重ねて参りました。外見は、そのままの姿を何十年も保存できるように、補強工事を行います。内部一階は、会議室と事務室、二階には展示スペース及びグランドピアノを配置した小ホールとし、全体的にレトロ調に仕上がります。八月初めには完成し、八月十一日の総会にて学部へ寄贈します。

昭和六十三年六月二十日に発行された同窓会報第二号に「：長期事業としては、第一に同窓会館の設立である。同窓生の諸会合をはじめ、親睦交流、研究発表の場として、ぜひ、将来構想として考えてみたい。」と記された松橋英幸初代会長をはじめとする、同窓会創立時からの諸先輩たちの願いを、三十年の時を経て、形にできたことを嬉しく思います。「信州大学教育学部同窓会 赤煉瓦館」と名付けられたこの建物が、今後、教育学部のシンボルとして、同窓会員だけではなく、学生や大学職員、そして、地域住民にも親しまれて、幅広く利用されていくことを期待したいと思います。

その他、記念事業として、歴代の同窓会関係者に集まって頂き「座談会」を開催しました。諸先輩たちのお話からは、同窓会の今までの歴史を顧みることができ、その時々願いや思いが伝わってきました。また、これからの同窓会の在り方についても示唆を頂きました。その様子については、本紙に掲載されております。また、記念講演会として、今年の正月に箱根駅伝三連覇を達成した、青山学院大学監督、原晋氏にご講演いただきます。たくさんの方々のご来場を期待しております。

創立三十周年の今年を一つの節目として、今後、益々「信州大学教育学部同窓会」が発展していくことを祈念して、巻頭の挨拶と致します。

第二十九回 同窓会通常総会報告

1. 通常総会の日時・会場

平成28年8月11日(木 祝日) 午前10時開会
ホテル信濃路 長野市中御所岡田町131-1

2. 出席者数

43名

3. 開会宣言

中村 礼子 副会長

4. 挨拶

進行：小池 秀雄 幹事長
土屋 聖史 会長

5. 議事

経過概要及び結果
議事に先立ち、会則第16条に基づき、総会議長の互選を行う。

(1) 議長団の選出

田中茂伸・芳原毅彦の両理事を議長団に選出した。

(2) 議事録署名名人の選出と書記の任命

田中泰之・伊藤浩光の両理事を議事録署名名人に選出し、宮本勇・小林比出代の両幹事を書記に任命した。



会長挨拶 土屋聖史会長



祝辞 永松裕希学部長

第二号議案

平成27年度事業報告書、一般会計歳入歳出決算書、特別会計決算報告並びに財産目録の承認について

(1) 中村直人事務局長より総会資料に基づき、平成27年度事業について説明があった。これに対し、組織充実に関する意見が出された。

齊藤忠彦幹事より総会資料に基づき、平成27年度一般会計歳入歳出決算、特別会計決算並びに財産

目録について説明があった。また、三沢弘幸監事より業務監査・財務監査の結果、適正に処理されているとの報告があった。

原案どおり拍手により全員一致でこれを承認した。

第二号議案

平成28年度事業計画(案)及び一般会計歳入歳出予算(案)の承認について

(1) 中村直人事務局長より総会資料に基づき、平成28年度事業計画(案)についての説明があった。これに対し、会費未納者への納入依頼に関する意見が出された。

(2) 齊藤忠彦幹事より総会資料に基づき、平成28年度一般会計歳入歳出予算(案)についての説明があった。

原案どおり拍手により全員一致でこれを承認した。

第三号議案

第15期役員交代について

土屋聖史会長より、人事異動に伴う役員交代についての説明があった。

原案どおり挙手により全員一致でこれを承認した。

第四号議案

創立30周年記念事業について

土屋聖史会長より、創立30周年記念事業実施計画(案)及び信州大学教育学部同窓会館(仮称)整備計画(案)についての説明があった。これに対し、記念事業実施計画については、来賓の人選について、また、同窓会館(仮称)整備計画については、建設に関わる経費面、敷地内への出入口の問題、北校舎との接続、建物周囲のヒューマンスペース(テラス)の設置、耐震性の問題、非常口の検討、空調の計画、建設後の運営経費について質問意見が出され、土屋会長より

回答があった。

6. 来賓祝辞
原案どおり挙手により全員一致でこれを承認した。

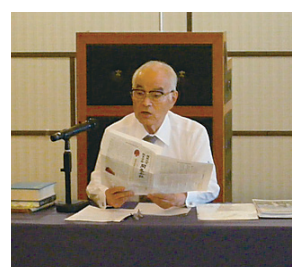
永松 裕希氏(教育学部学部長)のご臨席があり、祝辞をいただいた。

7. 閉会宣言

中村 礼子 副会長



講演 清水厚實氏



平成27年度信州大学教育学部同窓会一般会計歳入歳出決算書

自 平成27年4月 1日
至 平成28年3月31日

歳入合計額 6,151,987円也
歳出合計額 5,394,649円也
差引残額 757,338円也 翌年度へ繰越

〈歳入の部〉

項 目	予 算 額	決 算 額	増・△減	備 考
1 前年度繰越金	99,1345	991,345	0	
2 会 費	5,760,000	5,160,000	△ 600,000	258名入金
3 雑 収 入	5,000	642	△ 4,358	利子
歳 入 合 計	6,756,345	6,151,987	△ 604,358	

〈歳出の部〉

項 目	予 算 額	決 算 額	増・△減	備 考
1 会 議 費	580,000	395,638	△ 184,362	総会・役員会等
2 事 業 費	1,300,000	1,069,900	△ 230,100	会報・学部後援等
3 事 務 費	2,355,000	2,191,885	△ 163,115	会報発送・印刷等
4 事務委託費	1,586,000	1,586,000	0	雇用費等
5 雑 費	150,000	149,112	888	連合会会費・謝恩会御祝儀等
6 予 備 費	785,345	2,114	△ 783,231	HP外注費
歳 出 合 計	6,756,345	5,394,649	△ 1,361,696	

ご挨拶

教育学部長

永松 裕希



同窓会員の皆様方、そしてご関係の皆様方、同窓会設立三十周年、誠にありがとうございます。教育学部教職員を代表いたしまして、心よりお祝い申し上げます。

また三十周年記念事業として教育学部キャンパスにあります国指定文化財の煉瓦書庫を同窓会会館として整備いたしておりますが、いよいよ同文化財の改修工事が春の訪れとともに始まりました。教員を志す本学部の若者たちに、同じ道を歩んで行かれた諸先輩方の熱い思いが受け継がれていく拠点となりますことを強く期待しますとともに、ご寄附いただきました同窓会様に心より感謝申し上げます。

さて教育学部の近況をお知らせしたいと思っております。昨年度の本誌でのご挨拶の中で触れさせていただきました教育学部および大学院の改組につきまして、無事一年が経ち、この四月から新入生を迎えて二年目がスタートいたしました。平成二十九年年度の学部の新入生は二四六名で、入学式やガイダンスでは将来の夢を膨らませつつ、真剣なまなざしでこれからの大学教育の説明に聞き入っております。皆、教育学部の伝統を受け継ぎ、これからの学校教育を支えてくれる人材ばかりと確信しております。

また、大学院は修士課程二十八名、教職大学院二十一名と、それぞれ定員を上回る入学者を迎えてスタートいたしました。いずれも高い専門性と実践力を身に付けて、新しい時代の学校づくりに貢献する人材となってくれることを期待しております。とりわけ教職大学院は、入学者二十一名のうち十五名が長野県の学校からの現職の先生方であり、今後の大学院教育のあり方が国レベルで議論されている昨今、現職教員研修の新しい形として、外部からも注目を集めているところであります。

教育学部の研究におきましても、昨年度から今年度にかけて大きな変化がありました。教育学部は、これまでにも

退職にあたって

理科教育グループ

別府 桂



一九八二年の四月に、まだ積雪が一メートル以上残る志賀高原の志賀自然教育研究施設に技官として着任して以来、三十五年が過ぎ去ろうとしています。

今、当時のことを思い出してみると、志賀自然教育研究施設では、園内整備（遊歩道整備）やら、自然観察ガイドやら、学生実習やらと屋外での仕事が多かったこともあり、「若いから何とかこなせた」というような仕事ばかりだったような気がしています。

二〇〇〇年四月からは長野市の教育学部に配置換えになりましたが、配置換えになってからは、自宅で俄か百姓をやっていたせいか、大学の畑を使った授業をいくつか行うことになりました。自宅での農業は、「出来高無視の何か収穫できたもうけもの：」程度の農業でしたので、果たしてこんな知識や技術で学生に畑仕事を教えられるのか悩みましたが、作業補助員さんの協力のおかげで、自分でもびつ

くりするほど収穫が上がる農業をすることができ、ノウハウを持っている人から教わることの大切さを学ばせてもらいました。しばらくすると、卒業単位とは関係ない学生が、畑の授業を取るようになったりして、畑の面積に対して、作業する学生の方が多くなり過ぎ、受講制限をかけるをえないこともありましたが、収穫祭などは、学生たちにもそれなりに喜んでもらえたのではないかと思います。

そんなこんなでドタバタ大学生活でしたが、志賀で覚えたチェーンソーやビバーの使い方、長野キャンパスの畑で覚えたトラクターや耕運機の使い方などは、退職後の自宅の農作業にうまく生かすことができ、これほどありがたいことはなかったと思っています（四月からは、自宅で農業をします）。見方を変えれば、この職場は、在職中に定年後の技術・技能訓練もしてくれていたのだ、ということもできます。こんな至れり尽くせりの職場で、のほほんと過ごせた自分は幸せ者だったと今つくづく思っています。本当にお世話になりました。

学部の新転任・転退職教員の紹介

【平成二十九年年度新転任教員】

下山 真衣 先生（特別支援教育）

【平成二十八年度転退職教員】

村松 久和 先生（理科教育）

昭和六十二年四月一日 着任、定年退職

小島 哲也 先生（特別支援教育）

昭和五十七年四月一日 着任、定年退職

別府 桂 先生（理科教育）

平成七年四月一日 着任、定年退職

岩男 考哲 先生（言語教育）

平成二十二年四月一日 着任、退職

田中 真由美 先生（言語教育）

平成二十五年十月一日 着任、退職

「信州大学教育学部同窓会 赤煉瓦館」の竣工にあたり

同窓会幹事(信州大学教育学部)

齊藤 忠彦

(1) 「信州大学教育学部同窓会 赤煉瓦館」整備の経緯

教育学部の敷地内に「赤レンガ書庫」と呼ばれてきた明治期の建物があります。長年、書庫として使われてきましたが、平成26年11月の長野県北部地震で被害を受け、建物の床や壁(内部)の一部崩落により、書庫としての機能が果たせなくなりました。大学としては建物を修復するための予算化ができないため、そのまま放置され、将来的に取り壊されてしまうのでは、という危機的な状況にありました。ちょうどその頃、同窓会では、30周年記念事業として、何か大学に貢献することができないかという検討を行っていました。そこで注目したのが、この建物の修復事業です。幹事会や理事会での議論、同窓会館整備委員会を立ち上げての具体的な検討、そして平成28年度総会での審議を経て、長年積み立ててきた同窓会基本財産を投じて、歴史的にも価値がある建物を、耐震工事を含めて修復し、同窓会館としての機能も有する建物として蘇らせるという事業を推進することになりました。

「信州大学教育学部同窓会 赤煉瓦館」(以下、「赤煉瓦館」と命名し、平成29年夏、同窓会のシンボルとなる建物として生まれ変わります。



改修前の全景

(2) 建物の歴史と特徴

明治28年(1895年)、長野県庁の書籍庫として竣工しました。明治41年(1908年)、県庁舎は火災にあいましたが、この建物だけが焼失を免れました。明治44年(1911年)、長野師範学校が譲り受け、長年、教育学部の書庫として使われてきました。レンガ造りの2階建、寄棟屋根、棧瓦ぶきで、和洋折衷の建物です。延床面積は118㎡です。レンガの重ね方は、「イギリス積み」と呼ばれる方法で強度が高くなっています。屋根を支える小屋組みは松材を使用しています。平成20年(2008年)に、国の登録有形文化財として登録されました。1800年代の赤レンガの建物で現存しているものは全国的に見ても数少ないと言われています。信州大学のすべてのキャンパスの中でも、最も古い建物です。



改修前の内部(書庫)

(3) 「赤煉瓦館」整備の趣旨

○多目的に使用できる施設とする。

1階に会議室、事務室、トイレ、2階にホールを設け、在校生や教職員、そして同窓会員(卒業生)が、会議、研究会、セミナー、演奏会、作品展示など、様々な場面で使用できる施設とします。ホールにはグランドピアノを設置します。

○耐震補強をし、永久保存できる建物とする。

最新の工法(炭素繊維シート工法)で耐震補強を行い(改修前…IsⅡ0.15、改修後…IsⅢ0.7)、国登録有形文化財を永久保存できるようにします。

○歴史的な資料を展示する。

長野師範学校時代の歴史的な資料の一部を展示できるようにします。

(4) 「赤煉瓦館」整備のコンセプト

明治28年の竣工当時の姿を残せるように、外装については、レンガは経年の劣化、鉄製の扉や窓は錆が目立ちますが、そのまま残すことにしました。内装については、中央に位置していた階段を壁側に移動しますが、小屋組みはそのまま残し、梁が見えるようにします。明治期の建物であることから、椅子や机などの家具や照明器具などは、レトロでノスタルジックな雰囲気のあるものを設置したいと考えています。

(5) おわりに

赤煉瓦館は同窓会館としての機能を有する建物とします。同窓会員の皆様には、積極的に利用していただきたいと考えています。利用規定や利用方法については、平成29年秋以降、同窓会ホームページに掲載する予定です。

今回の整備事業では、予算の関係から建物周辺の整備は行いませんでした。赤煉瓦館前の庭の整備、赤煉瓦館と講義棟を結ぶ専用通路の設置、夜間にライトアップできる照明器具の設置など、建物周辺の整備を進められるように、今後大学側との協議を継続していきたいと考えています。

最後になりますが、本事業は、30年前の同窓会設立時に多大なるご尽力をいただいた先輩諸氏の寄付金ならびに同窓会員の皆様の会費で実現したものです。なお、本事業の推進にあたりましては、信州大学学長の濱田州博氏、教育学部長の永松裕希氏、教

教育学部前事務局長の大竹博昭氏をはじめとする大学関係者の深いご理解と多大なるご協力をいただきました。信州大学工学部教授の土本俊和氏(建築史)には、貴重な助言をいただきました。関係各位に心より御礼申し上げます。



完成イメージ図

資料

・教育学部同窓会及び教育学部が、設計及び施工の発注を行った(同窓会による寄付工事)。

・建物の所有管理者は信州大学であり、竣工後の光熱費や建物の維持管理費は大学で管理することとする。

業者及び工期

設計…(株)宮本忠長建設設計事務所

施工…(株)守谷商会

工期…平成29年2月～平成29年7月

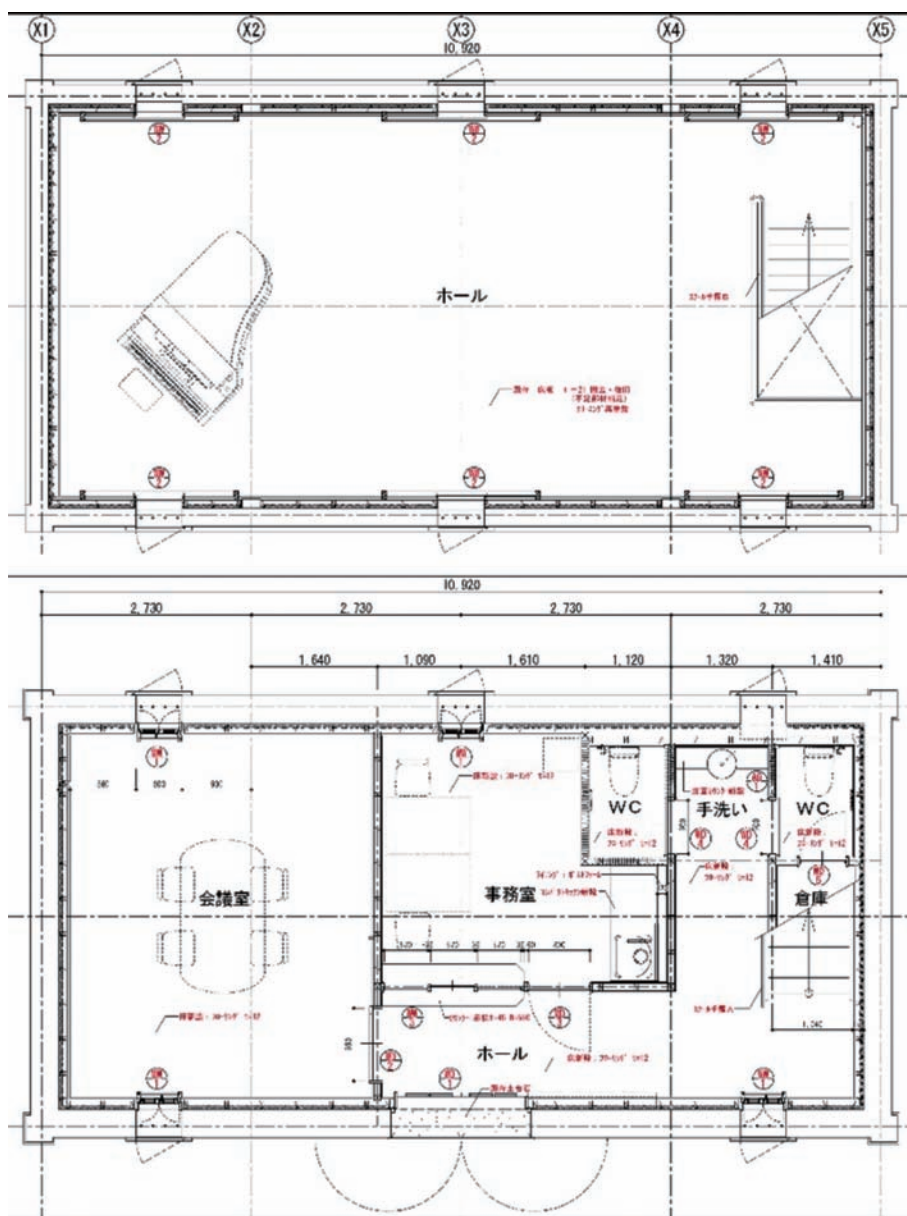
△事業費▽(信州大学教育学部同窓会基本財産より支出)

設計・監理費	4,998,240円
工事費	41,771,760円
合計	46,770,000円

△平成28年度同窓会館整備委員会▽

◎土屋聖史(同窓会長)、中村直人(同窓会事務局長)、伴真理子(同窓会事務局)、小池秀雄(同窓会幹事長、長野市立川田小学校長)、大竹博昭(教育学部事務長)、大森一憲(教育学部管理係長)、岩田靖(同窓会本部理事、教育学部教授)、伊藤冬樹(同窓会幹事、教育学部准教授)、齊藤忠彦(同窓会幹事、教育学部教授)

「赤煉瓦館」平面図(1F:下段の図, 2F:上段の図)



信州大学教育学部同窓会

創立30周年座談会

参加者..

関谷俊行(1期生)

中田宣彦(第8期会長)

深澤弘二(第12期会長)

宮本 勇(幹事)

杵渕恭宏(初代事務局長)

糟谷房枝(第10期副会長)

土屋聖史(第14・15期会長 司会)

中村直人(事務局長)



土屋 お忙しい中お集りいただき、ありがとうございます。今日は、同窓会に関して、今までの経過や先輩たちの想いを語っていただきたいと思い、座談会を企画しました。まずは、自分が関わっていた時の思いや願い、またその時代のこと、そして、今後の同窓会の存在意義、展望について、自己紹介を兼ねてお話しさせていただきたいと思います。



中田 平成11年から副会長、平成13・14年と会長をさせていただきました。当時の大きな問題は大学の独立法人化でした。信州大学あるいは教育学部そのものが無くなるんじゃないか、教育学部が近隣の上越教育大学とか山梨大学の教育学部と合併するんじゃないか等の噂があり、大学自身が悩まれたことが思い出されます。今日は、そのようなこともお話しできればと思っています。



関谷 第1期生です。昭和32年に松本分校から採用され、学部が統合された昭和41年度からは学部美術科に勤めさせていただきました。

昭和48年頃と記憶しておりますが、1期生の有志が434名の同期生に呼びかけて原稿執筆と1万円の基金を募集して、2年がかりの編集作業の上「学窓として三十年」という800頁ほどの記念誌を出版しました。この本は1期生に配布したほかは有料で

数百部ほど頒布しましたので、ご存知の方も多いと思います。

そしてこの出版の事務所に私の研究室が当てられましたので、その後も成り行きから教育学部同窓会の設立にも関わらせていただき、第2回総会までの事務局を担当させていただきました。



杵渕 私はもとと教育学部の教官でしたが、その時に会が出来たものですから、現職の時に事務局的なことを全部やってきました。その後、初代事務局長に就きました。当初は、関谷先生が作ってくださった同窓会の運営方針を引き継ぎながら、もっぱら同窓会の会員を増やすことが目標でした。そのころは同窓会へは、卒業生の皆さんに入ってもらおう形をお願いしていましたので、会員数が少なくて運営がままなりませんでした。そこで学部をお願いしまして、入学時に同窓会費を納入していただく依頼書を、合格通知の袋に入れていただくようになりました。また、会員を増やす工夫もいろいろやりました。当時はもちろんホームページ等はありませんでしたが、インターネット関係で知らせることが増えてきましたので、会費徴収の手段にしようとして自己流の同窓会ホームページを作ったわけです。当時はまだ個人情報うんぬんの時代ではなかったため、会費未納者の欄を作り、個人名で呼びかけました。もちろん、今はありませんが。

そのうちに、法人化が話題になってきましたが、私の手には負えそうもなさそうですし、もう10年も務めて体も能力も追いつかなくなる気配を感じましたので、10年を区切りに退かせていただいたわけです。



深澤 12期の会長を務めさせていただきました。当時、同窓生の小平泰緒さんのバンクーバーオリンピック壮行会に出席したことが、強く印象に残っています。私は同窓会の存在そのものを、あまり深く考えたことがなかったのです。それは、小中学校の職場では周りを見れば信大卒ばかりという時代を歩んで来たからだと思います。しかし、同窓会を担当する中で、信大卒がずいぶん少なくなったなと感じました。そこで考えたのは、信大の

学生をなんとか信州教育を支える人材として活躍していただけるようにしたいということでした。私自身も附属学校で7年間教官を務めました。信州大学の教育実習はなかなか厳しいもので、その厳しい実習を乗り越えたからこそ信州教育を支えられる力を持つと思っています。しかし、信大卒の採用が少なくなつて、存在感が薄れてきていると知り、それをなんとかしたいと思ったわけです。同時に、同窓会の存在も薄れてきていると感じます。なんとか同窓会であることを大事にし、後輩の活躍や同窓会員の親睦を深めるようなつながりが出来ないものかと強く思ったことを思い出します。



糟谷 私は10期副会長として関わらせていただきました。深澤先生に同感で、現在長野県下に約80人の女性校長がいますが、信大卒がだいぶ少ないですね。教頭先生でも他大学出身の方が増えていると感じています。今は、男女共同参画、女性の登用と言われているわけですが、広い意味でもまた後輩を育てていかなければいけないと感じています。在任当時、新入会員を増やすだけではなく、新しく校長先生や教頭先生になられた方々で、未加入の先生方には働きかけようと話し合ったことを覚えています。今はどんな加入率なのか現状を教えていただければうれしいです。

土屋 ありがとうございます。この後は、最初に関谷先生に学部との関係等、立ち上げの話を詳しくお話いただいて、その後杵渕先生にはその流れを受けて引き継いだこと、法人化の話や会費を入学生からいただく話などを含めてお話いただきたいと思います。中田先生、深澤先生、糟谷先生には途中で話に絡んでもらえるとありがたいです。それでは関谷先生、同窓会立ち上げの動きについて、お話しください。

関谷 はじめは昭和58年11月9日に「各学部同窓会代表者懇談会」が北條学長先生の招集で開かれ、当時の岡宮学部長さんから指名されて松本の大学本学へ出かけました。会議は連合大学院間

題とか、他大学に対して信州大学のアイデンティティをどのように高めるなどが話し合われ、そこから信大でも同窓会連合を作ろうという機運になったのです。

翌年の昭和59年学部長さんから全県の1期会総会で研究してほしいという要請があり、近くの役員さん方と相談して60年8月、1期会内に「同窓会問題研究委員会」を立ち上げ、その後、全県1期会総会の承認を経て昭和61年1月から千原学部長さんを会長に「同窓会設立準備会」を設置推進しました。

そして、61年8月に「同窓会設立発起人会」が松橋英幸会長はじめ200名以上の賛成で成立。それからは学部卒業の教官方の協力もいただいて、いろいろの準備を重ねながら、昭和62年8月11日の設立総会にこぎ着けたわけです。

土屋 ありがとうございます。そうすると、同窓会の立ち上げには、5年間くらいかけて、まずは1期生が動いたという捉え方で良いのでしょうか。

関谷 先ほどもお話ししましたように、設立準備会が「設立趣意書」を作成する段階で、古い卒業生から各年次ごとの全教科・学科にわたってご賛同いただいた200人以上の皆さんのお名前をお願いしておりました。ですからこの方々は早くから終身会費の1万円を出してくださったので資金的な不安はまったく感じませんでした。設立してからの運営は新入生からの終身会費になりましたので、その後は過年度卒業生の会費は同窓会館など将来のために積み立てようと今日までやってきたと思います。

土屋 立ち上げの時から、いずれは大学院の設立や同窓会館の建設も考えられていたようですか。

関谷 ほんやりしたイメージはあったんですが、当面は大学院の修士課程が目標でした。文部省は大学からの申請があっても、地域の教育界はもちろん学生や保護者や卒業生たちの要望や、さらに地方議会の決議などの全体を把握しながら信州大学に修士課程を作るかどうか判断するんですね。そのために同窓会

組織が必須の条件だと岡宮先生は考えられたんだと思います。

しかし、「信濃教育会あるからいいじゃないか」とか、「信大閥を作ってはいかん」などの異論もあつて、作らざるを得ない情勢についてはなかなか理解してもらえませんでしたね。

土屋 ありがとうございます。続いて、杵渕先生に、会費とか法人化の問題とか動きが出てくる頃について、お話をお願いします。

杵渕 私が事務局長として同窓会に携わる前までは、新入生の入会金は1万円でした。それで徐々に運営費用が不足するようになり、今は2万円にしました。合格者全員に合格通知と同時に振り込み用紙を送っていますが、私の頃は50〜60人は未納でした。その人たちには年2回、親のボーナス時期にお願いをしました。1人でも同窓会に入ってくればという気持ちでした。また、現職の先生にも未加入者がたくさんおられましたし、役員になっても未納のままで、自分が会員会費納入済みかどうか分からずによく役員を引き受けたな、と事務局で話題にしたことがあります。

土屋 私も実はそうでした。耳の痛い話ですね。

杵渕 役員はほとんどが校長先生ですから、教育学部出身の先生には声をかけてくださいと、お願いをして集めました。加えて、管理職にいる先生が、確実に同窓会に入ってくださいよう広報に努めたつもりです。

それから、私は、大学教官の厚生会と学部事務職員の厚生会の両方を経験しているわけですが、両方とも年々行事への参加者が少なくなり、仲間同士の付き合いが薄れたように感じています。同じように、同窓生同士の付き合いも少なくなっていると思うと、寂しい気がします。

関谷 話に戻りますが、大学院の必要性については同窓会報第3回号の編集後記に「高等学校の校長になるためには大学院を卒業しなければなりません」と書いてあります。近隣の教育系大学に修士課程が設置される中で後れを取ることは許されませんか。

た。またもう一つの社会的な必要は父母の方々が高学歴になられた現状でしょう。PTAの席上などでも、教員とのバランスは制度的にだんだん整備されなければならないのではないのでしょうか。

土屋 実際に大学院ができましたからね。

関谷 同窓会の活動はひとつの大きな力になったわけですよ。その辺は自信をもつて同窓会を喧伝していいと思いますよ。

土屋 私が思うのは、卒業生の間に同窓会がなかなか位置づいてこないことです。先ほど深澤先生がおっしゃったように、我々長野出身の人間は、教員として県内どこに行っても信州大学の仲間と会えるわけで、特別にどこかに集まってやらなくちゃいけないという意識は非常に薄いのですが、東京の信大同窓会に行くと、信州で学んだという人たちが仲間意識を持って集まってくる感じがやっっているんですよ。深澤先生、いかがですか。

深澤 副会長の時に東京のオール信大の同窓会に出ましたが、出席した教育学部の卒業生はわずか2人でした。1時間半ほどの懇親会でしたが、その席上、私はどうやって過ごしたら良いかと思っていたんですが、1時間半があつという間でした。それは、私がたまたま乾杯の発声をやったことで、周りの方々から「教育学部の卒業生でしたか」「自分はこうなんですよ」と声をかけていただき、どんどん関わりをもつていただけですね。とても嬉しく、そうした中で同窓であることを大事に考えてくれるなど感じました。ですから、あつという間の1時間半だったわけです。

中田 東京の同窓会というのは、昔からあつたのですか。

深澤 あつたのですが、正式に発足したのが、私が副会長をしていた時(平成20年頃)です。だから歴史はまだ浅いんです。

土屋 最初は理学部とか医学部などの山岳部出身の方々が中心になつてつくられたようです。

中田 東京支部は、信州大学の懇親会みたいな集まりですね。

土屋 それでは最後に、今後の同窓会の存在意義、展望、願いなどを聞かせてください。

中田 これまで先輩たちが貯めてくださったお金は、同窓会館を作るためという長期構想があって、蓄積されていますが、今回半分少しを赤レンガ館に使う形になって大いに結構かなと思います。いずれにせよ、同窓会の活動のメインは、今の学生や今後の学生たちの後押しだと考えています。一方、研究補助で1人1万円を10人に補助していますが、これは卒業生への貢献のひとつで、これも大切です。

今は2万円を入学生からいただいているので、会費の面では良いですが、今後を考えると、同窓生のつながりとか関心の薄さを向上にするのは難しいだろうと思うのです。それから、事業内容が固定化し、新しい企画が出てくなくなっているのが、現在の5つの事業分野は大切にしながら、一層進化拡充できるとよいと思います。中でも、海外からの留学生あるいは海外へ勉強に行きたい学生への補助や経済的な事情による苦学生が減るように出来ないものかと思っています。例えば、知の森基金とタイアップしながら、学費や入学金等の資金援助は教育学部でもできればと思います。そして、学部全体への支援になるような資金も大切にしたいと考えます。同窓会が学生を積極的に後援でき、赤レンガ館に象徴されるような実在感がある団体として一層発展できたらと思います。

糟谷 中田先生が話されたことには同意見です。加えて、先ほど出された「人とのつながり」の点で申し上げますが、私たちは女性だけで信大44会という会を年1回開催しています。実際に集まるメンバーは15人ほどで、県内いろいろな場所で行っています。教員を経験した仲間ですので、話題は、学習支援に入ったり何かの形で応援したりしている現場の様子、子育てや孫育てのこと、もちろん昔の教育学部でのことや教員としての経験も話します。教育学部を卒業してからだいぶ経った私たちですが、同窓会館があることが私たち44会の心の拠り所になるのかなと感じています。

深澤 これまで同窓会は、学生の皆さんを支援するとか、現職で活躍されている先生を支援することを中心に行っていました。研修に対する手厚い支えは素晴らしいことだと思います。だからこそ、更に同窓会の中で深めたものを発信する体制ができれば良いなと思います。

更には今糟谷先生のお話を聞いて思ったのは、同窓会員同士の親睦の機会を持つことの大切さです。この中で語り合えるのは、同じ経験を積んだ同窓の和の中だからこそ出来ることだと思うのです。同窓会はいい会だ、楽しい場だという雰囲気を作ることも大事じゃないかと思っています。

杵渕 私は今の学生にも研究補助と同じようなことができる窓口を作ったかどうかと思っています。学生の時に1万ももらった10人は、卒業してからも同窓会からこれをお願いしたのだという思いが残ると思うのです。それが10年経てば100人になりますね。費用のこともありますが、学生諸君にも同窓会の良さが分かる人が増えれば良いなと思っています。

それともう一つ、学部卒業の教官が少ないので、なんとか増えるような手だてではないのでしょうか。就職員をしている時には、高等学校のガイダンスに行つてぜひうちの大学に来てくださーいと言つて回つたことがあるのですが、その時に「信州教育の根幹を作つたのは、故郷を盛り上げた教員であり、優秀な人たちは勉強をした後に故郷に帰つて盛り上げたんだよ。」という話をよくしました。そういう意味でも、教育学部の先生には、地元出身の優秀な人たちが戻つてきて、ゆくゆくは学部の教授になってくれればと思います。我々にはどうすることも出来ないなと思つていつも寂しく思っています。

関谷 長年この会の幹事を務められ、現在も広島にある福山大学の理事長として活躍中の清水厚實君からも度々ご指摘されておりますが、私も同窓会の公益法人化は是非とも進めていただきたいと思います。

信州大学が既に実施しております「知の森基金」のように、まず基金募集ができるような公益性を持った法人化が第一歩だと思います。

います。

これからの同窓会の在り方としては自分たちの問題だけでなく、このように同窓会の発展していく社会環境を広く見渡して、その地域の公益にまで配慮してサービスが求められるのではないのでしょうか。

どうぞ事務局でもさらにご検討くださいますようお願いいたします。

土屋 数年前の理事会では、30周年については極力簡単に行うという方向が決まっていました。ところが、地震で赤レンガ倉庫の中がぐしゃぐしゃだという話があり、合わせて、信州大学教育学部のシンボルは何も無いと聞きし、なんとかあそこに同窓会館を設置しようという話になりました。改修をして大学に寄贈する形ですが、それで30周年事業が大規模なものになりました。

同窓会創立当初からの願いであった大学院は、すでに設立されています。もうひとつの願いであった同窓会館の設立が、30周年を迎える今年、実現できたことを、会長として嬉しく思います。

そして、本日、皆さんからお話いただいた願いや思い、そして、これからの課題も踏まえ、30周年を一つの節目として、今後更に充実した同窓会になっていくことを期待したいと思います。

本日はお忙しい中、貴重なお話をありがとうございました。以上で座談会をお開きいたします。



教職大学院初年度報告

大学院教育学研究科 高度教職実践専攻代表

伏木 久始

平成28年4月、信州大学大学院教育学研究科に新しく高度教職実践専攻が誕生しました。いわゆる教職大学院です。本専攻で目指す教師像は、思考力・判断力・表現力等を高める指導力と、多様な教育課題に柔軟に対応できる高度専門職であり、学校改革や授業改善に向けて様々な立場の人と協働しながら学校内の多様な課題を解決できる能力やマネジメント能力を持った中核的教員です。入学定員は20年で、新しい時代に対応できる新人教員を育成する「教職基盤形成コース」(定員5名)と、勤務校を拠点として学校改革・授業改善の中核を担う教員を育成する「高度教職開発コース」(定員15名)の2コースからなります。1期生も2期生も、教職基盤形成コースの入学者は6名ずつ、高度教職開発コースには現職教員が長野県教育委員会から派遣される形で各学年5名ずつ在籍しています。また、教育学部附属学校の教員からも毎年10名ずつ入学するシステムを構築し、附属学校の活性化を同時に進めていく戦略的な大学院としても注目されています。

本専攻の特色は、学校拠点方式を採用していることです。学校拠点方式とは、学校をフィールドとし、実習を基盤に具体状況に応じた指導のあり方や実践の省察を深めることを重視する方式です。学ぶ内容は学問体系に求めるのではなく、現場が抱える課題の中から抽出し、大学教員が学校に出かけて「現場」で演習を行う機会を重視しています。具体的には、平日の夜間授業や休日の集中講義に加えて、県内外の学校へフィールドワークに出かけたり、拠点校におけるチーム演習を継続的に実施したりしています。また、専門分野の異なる複数の研究者教員と実践経験豊富な実務家教員とのチーム指導体制により学生指導しています。ようやく2学年が揃い、学生と教員が丸となって新しい学びの伝統を作り始めておりますので、今後ともご支援をお願い致します。

附属次世代型学び研究開発センターおよび『学びセンタープロジェクト』紹介

附属次世代型学び研究開発センター長 村松 浩幸

1. 「学びセンター」とは？

附属次世代型学び研究開発センター、通称「学びセンター」は平成28年4月にそれまでの附属教育実践総合センターを改組する形で、立ち上がりました。学びセンターは、教育委員会並びに学校等との連携を図り、「学び」に関する理論的、実証的かつ臨床的な研究・開発を行うとともに、実践的指導力を持った教員の養成並びに現職教員の研修に寄与することを目的としています。特徴は、次世代の新しい学びを対象として、教育研究・開発に特化したことです。小中高の学習指導要領の動きや大学入試改革等を見ても、これまでにない教育改革が展開されています。こうした動きに対応しつつ、学部教員と学校現場のみならず、行政や企業とも連携しながら、名称通り次世代の教育の研究開発を進めています。

2. 学びセンタープロジェクトとは？

学びセンターでは、上記目的達成のために、3つのプロジェクト群を設定しました。①戦略プロジェクト(学部戦略に基づくプロジェクト及び時期学習指導要領等に関わる大型プロジェクト)、②実践研究支援プロジェクト(県内教員と学部・研究科教員との共同研究支援に関わるプロジェクト)、③産学官協働プロジェクト(産官学による協働での研究・開発に関わるプロジェクト)の3つです。

①戦略プロジェクトでは、文科省の大型事業である英語教育の指導法改善事業を支援しています。また、附属松本地区学校園では、文科省の研究開発学校としての取り組みを開始し、長野地区では、長野小・中学校において、先進的情報教育の調査家研究事業に取り組んでいます。それぞれに支援をさせていただいております。こうした附属学校の事業は、従来見られなかった新たな取り組みです。

②実践研究支援プロジェクトでは、学部教員と県内教員が

連携して教育研究に取り組むプロジェクトを研究費や広報等で支援させていただいております。28年度は小中高、附属公立合わせ、計10件のプロジェクトに支援をさせていただきました。昨年度開催した「第1回学びフォーラム」では、それら多彩なプロジェクトの紹介がなされました。29年度も同様に展開し、学部と学校現場の連携をさらに支援していきます。また、教員研修センター事業として、飯田市・高森町・喬木村と連携し、次の学習指導要領のキーワードでもある「主体的、対話的で深い学び」の教員研修プログラムを開発し、その成果をリーフレットとしてまとめ、公開もいたしました。

③産学官協働プロジェクトでは、東京都日野市平山小学校でのプロジェクトが大きな成果を上げました。ここでの成果は国の様々な教育施策にも影響を与えると共に、附属学校教員や学生、院生らが多数公開研究会に参加させていただき、学びの場となりました。他にも、3Dプリンタ等のデジタル加工機を置いた工房「FabLab長野」等、様々なプロジェクトが進行中です。

29年度は上記に加え、「学びセンター」教育の情報化自治体支援事業(試行)を立ち上げる予定です。県内の教育の情報化の状況は、全国的と比べると残念ながら課題の多いのが現状です。そこで学びセンターの持つ知見やノウハウを積極的に提供し、困っている自治体を後押しさせていただこうと思っています。

3. 次世代の学びの構築に向けて

「学びセンター」が立ち上がって1年。お陰様で大学本部はじめ関係各所から高い評価をいただいております。スタッフ一同、教育学部、長野県教育、さらには日本の教育の発展に寄与できるよう、さらに取り組んでいきたいと思っています。私たちがお役に立ちそうなお知らせ、ぜひご連絡ください。お待ちしております。

学びセンターサイト…
<http://crii-shinshu-u.info/>



同窓会情報

教育学部同窓会・研究補助事業について

本号でも、平成十五年より実施しております同窓会研究補助事業についてお知らせいたします。

本事業の主旨は、①日々の教育研究、教育実践を大切にし、自らの授業改善に努めること、②専門職としての教師自らの教育研究・教育実践を磨くこと、③教育の振興・改善についての情報を共有していくこと、に置かれています。対象者は教育学部同窓会員（同窓会費納入者）で、応募者一律に一万円を補助しています。応募希望者は所定の様式（「研究補助願及び研究概要」）にしたがって、同窓会事務局（〒380-8544 長野市西長野6-10）にお申し込み下さい。当該年度の十一月末日を応募締め切りとしています。応募規定などの詳細な内容は、同窓会ホームページをご覧ください。なお、お申し込みの際には必ず事務局までお問い合わせ下さい（研究補助は十名までとなっており、受付可能かどうかの確認のためです）。

平成二十八年度助成交付の研究テーマ

①吉永 章人（大阪府箕面市彩都の丘中学校・小学校（彩都の丘学園））

「小中一貫を活かしながら、筋道立てて説明する力を育てるために――小中一貫校での数学科・算数科での実践を基に――」

②熊谷 憲（長野市立更北中学校）

「主体的に読み、考える力を育てる指導のあり方――文学的文章の学習における単元を通じた言語活動を手だてに――」

③赤羽 健郎（長野市立更北中学校）

「根拠を明確にし、課題解決に取り組む力の向上を目指して――身近にある具体物を教材として活用して――」

④渡辺 美沙都（長野市立豊野中学校）

「福井県の学力向上に学ぶ」

⑤原山 直久（長野市立更北中学校）

「生徒自ら数理を追究していくためのきめ細かな指導のあり方」

⑥山崎 俊彦（長野市立更北中学校）

「図形学習教具ボリドロンを用いた空間図形の導入」

⑦山岸 千賀子（長野市立長沼小学校）

「地位と共に創る教育活動」

以上が、平成二十八年度における補助金交付者及び研究テーマに関する一覧です。これらを大いに参考にいただき、積極的に応募していただきますよう、よろしくお願いいたします。

研究実践より

小中一貫を活かしながら、筋道立てて説明する力を育てるために――算数・数学科――

大阪府箕面市立彩都の丘中学校・小学校
吉永 章人

転勤族として育った私は、小さい頃からさまざまな地方に住んできた。大学四年間を過ごした長野もそんな地域のひとつである。今でも、学部で教わった先生方やスタッフの方々との付き合いも続けている。本当に有難いことである。

さて、現在勤めている学校は、平成三年にニュータウン『彩都』のまちなりに併せ、府下では二番目に開校した施設一体型の小中一貫校である。まちの発展につれて、児童生徒数もこの五年間で二〇倍以上となった。府内外から来た、私と同じ転勤族である生徒も多く、校内で話される言葉はもっぱら標準語の方が多いのも興味深いところである。

本校は、小中一貫校という性格を活かし、校種間・教科間を越えた連携を推し進め、九年間で何を学んでいくのかについて研究してきた。私が所属する算数・数学科部では、小・中の教員が連携し、授業の流れやデザインを統一することから始まり、『筋道立てて説明する力』の育成へ

の研究へと発展させた。まず、小・中の教員がともに双方がどういった内容を取り扱っているのか共有する必要があった。そして、発達段階に応じて、中学校や高校で扱われる数学的用語を算数におろし、教員も子どもも意識的に使っていた。私自身も五・六年の算数にT・Tとして入り、七・九年そして高校で扱われる数学の内容について伏線として取り扱った。数学の授業では、その伏線を回収しながら授業展開につなげることができた。また、算数では、式がつくられる根拠を、数学的用語を用いるだけでなく図など様々な手段を用いて表現したりした。数学では、さらに発展させ、フローチャートを利用することで仮定から結論への論理的な思考を整理したり、あるいは数学者が誤った考え方について反論したりと、そんな活動を続けてきた。

こうした算数の頃から取り組んできた成果が、今ようやく見えようとしている。五年間そうした取り組みをしてきた生徒たちに、今までの活動について振り返ってもらったところ、こんな意見をくれた。「小中一貫校から、先生も算数の頃から知っているし、私たちも数学って気構え無くても、算数の延長として勉強できるで。」「小学校の頃に比べて、どうやったら相手にわかってもらえるかなーとか、説明の仕方でも大体わかったら、あとは自分なりのオリジナルにアレンジして、矛盾のない、丁寧な説明とか、もともとっと美しい解き方、考えられるようになってきたんです。そこは小学校の頃と比べて、私たち、すごいなーって。」もう、私たちだけで授業ができますよ。でも、進度がゆっくりになっちゃうから、やっぱり先生がいたほうがいいかも。」とながらツツコミのような辛いコメントもあるが、それも筋道立てて説明することに対するハードルが低くなったこと、そして自立して学んでいくことへの証左であろう。

現在、私は校内の研究推進に携わる組織の一人として学校運営に携わっている。本校は大規模校へ発展していくことで、前例のない課題が山積していく。だが、こうして自立してきた子どもたちの姿に勇気づけられながら、府内外の関係者との連携も深めながら、これからも研究を続けてきたい。



卒業・修了生の就職状況

就職部長 西 正明

本学部の就職支援活動に対して、教育学部同窓会より多大なご支援をいただき、心より感謝いたします。

さて、平成二十八年度の教育学部卒業生及び大学院教育学研究科修了生の進路状況が下欄の表のとおりにまとまりましたので、ご報告いたします。教員就職率は昨年度と比べ、少し低くなつてしまいました。この要因として最近の景気上昇感、着任猶予制度の利用が考えられます。

平成三十年度においては教員就職率を回復し高めていきたいところですが、取り巻く環境は一層厳しくなると考えられます。既に公表された長野県の「平成三十年度公立学校教員募集案内・採用選考要項」によりますと、平成二十九年度と比べ、各校種の教員採用人数は若干減りました。これは現任教員退職者の再雇用に係る人数の変動によるもので、政策的な変化ではないと確認しております。いずれにせよ、本学部及び大学院の学生にとって厳しい状況であり、この厳しい状況は今後も続く可能性が大きいです。本学部としては皆様のご支援をいただき、教員採用率を少しでも向上するように努力してまいります。

今後も皆様から忌憚のないご意見・ご要望をいただき、就職支援を充実させたいと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。



平成27年度卒業生・修了生 進路状況

就職・進学別 学部 大学院別			就 職 者														進 学 者				現 職	家 採	未 定	合 計	備 考							
			県 内						県 外						大 学 院 他 大 学																	
			小 学 校	中 学 校	高 等 学 校	特 別 支 援 学 校	幼 稚 園	そ の 他	小 計	小 学 校	中 学 校	高 等 学 校	特 別 支 援 学 校	幼 稚 園	そ の 他	小 計	計	公 務 員	一 心 社 理 員	病 院	ス ポー ツ 施 設	福 祉 施 設	小 計	大 学 院 他 大 学	研 究 院 講 義 生	専 門 学 校	そ の 他	小 計	職 教 員	事 務 員	定 計	
学 部	教 員 養 成 課 程	現代教育	男女	1 (6)	3 (3)	1 (1)	1 (1)	3 (2)	8 (4)	3 (3)	2 (1)				3 (1)	6 (3)	2 (2)			2 (1)	1 (1)					1 (1)					9 (9)	
		国語教育	男女	2 (1)	2 (1)	1 (1)		5 (2)	7 (3)	1 (1)	1 (1)				3 (1)	11 (4)	2 (2)		4 (4)	1 (1)	1 (1)	3 (3)	1 (1)			1 (1)				1 (1)	20 (20)	
		英語教育	男女	4 (2)	2 (1)			6 (3)	7 (3)						2 (1)	9 (4)	2 (2)		1 (1)		1 (1)	3 (3)	1 (1)			2 (2)					13 (13)	
		社会科教育	男女		1 (1)			1 (1)	2 (1)						0 (0)	2 (1)		4 (4)			1 (1)	4 (4)	2 (2)			1 (1)					6 (6)	
		数学教育	男女	4 (2)	3 (1)			7 (3)	7 (3)	1 (1)	1 (1)				2 (1)	9 (4)	1 (1)				1 (1)	2 (2)	1 (1)			1 (1)					12 (12)	
		理科教育	男女	1 (1)	6 (3)	1 (1)		8 (5)	8 (5)	1 (1)	1 (1)				3 (1)	11 (5)	1 (1)				1 (1)	2 (2)	1 (1)			1 (1)				1 (1)	14 (14)	
		音楽教育	男女	4 (1)	6 (3)			10 (4)	10 (4)	4 (3)	1 (1)				5 (4)	15 (8)	1 (1)				2 (2)	1 (1)	1 (1)			2 (2)				1 (1)	17 (17)	
		図画工作・美術教育	男女	1 (1)				2 (1)	2 (2)	2 (2)					4 (2)	6 (2)								1 (1)			1 (1)					7 (7)
		保健体育	男女	2 (1)	3 (1)	1 (1)		6 (2)	6 (2)	3 (3)			1 (1)		4 (2)	10 (2)					1 (1)	2 (2)	1 (1)			1 (1)				1 (1)	14 (14)	
		ものづくり・技術教育	男女	3 (1)	1 (1)			5 (1)	5 (1)						0 (0)	5 (1)	1 (1)					2 (2)	1 (1)			2 (2)					9 (9)	
	家庭教育	男女	7 (4)	3 (1)	1 (1)		11 (5)	11 (5)						0 (0)	11 (5)							1 (1)				1 (1)					12 (12)	
	学校教員養成課程（旧分野）	総合生活科教育	男女	2 (1)	2 (2)			5 (3)	5 (3)	1 (1)	2 (1)				3 (1)	8 (4)	1 (1)				3 (3)	5 (5)									14 (14)	
		社会科教育	男女		1 (1)			1 (1)	1 (1)						0 (0)	1 (1)							1 (1)									2 (2)
		数学教育	男女		1 (1)			1 (1)	1 (1)	1 (1)					1 (1)	2 (1)						2 (2)			1 (1)						3 (3)	
		音楽教育	男女					0 (0)	0 (0)						0 (0)	0 (0)					1 (1)	1 (1)									1 (1)	
		情報・技術教育	男女					0 (0)	0 (0)	1 (1)					1 (1)	1 (1)																1 (1)
		ライフプランニング教育	男女					0 (0)	0 (0)						0 (0)	0 (0)	1 (1)					1 (1)										1 (1)
		英語教育	男女					0 (0)	0 (0)						0 (0)	0 (0)	1 (1)															1 (1)
		国際理解教育	男女					0 (0)	0 (0)						0 (0)	0 (0)																1 (1)
		特別支援学校教員養成課程	男女			1 (1)		1 (1)	7 (2)	2 (2)			1 (1)	2 (2)	5 (1)	12 (2)		2 (2)	1 (1)	4 (4)	1 (1)		1 (1)	2 (2)		1 (1)					18 (18)	
教員養成課程計		男女	21 (10)	26 (13)	3 (2)	4 (2)	0 (0)	0 (0)	54 (27)	9 (4)	8 (2)	3 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	20 (8)	74 (35)	8 (4)	6 (3)	0 (0)	0 (0)	4 (2)	18 (9)	5 (2)	1 (1)	0 (0)	8 (4)	0 (0)	0 (0)	2 (1)	102 (51)	
	男女	27 (6)	18 (8)	0 (0)	9 (3)	3 (1)	57 (27)	13 (4)	2 (1)	2 (1)	1 (1)	2 (1)	1 (1)	21 (3)	78 (20)	9 (4)	0 (0)	18 (2)	0 (0)	3 (1)	24 (12)	8 (3)	1 (1)	0 (0)	13 (6)	0 (0)	1 (1)	3 (1)	130 (65)			
	男女	48 (16)	44 (21)	3 (2)	13 (5)	3 (1)	111 (44)	22 (4)	10 (4)	5 (3)	1 (1)	2 (1)	1 (1)	41 (11)	132 (55)	17 (8)	6 (3)	2 (1)	0 (0)	6 (3)	52 (26)	13 (6)	2 (1)	0 (0)	21 (10)	0 (0)	1 (1)	5 (2)	232 (116)			
	男女	1 (1)	2 (2)				3 (3)	1 (1)	1 (1)					2 (2)	5 (5)	3 (3)	3 (3)		1 (1)	7 (7)	1 (1)			2 (2)						14 (14)		
	男女		1 (1)				1 (1)							0 (0)	1 (1)		3 (3)			4 (4)	1 (1)			2 (2)						6 (6)		
	男女						0 (0)							0 (0)	0 (0)	1 (1)								1 (1)						4 (4)		
	男女						0 (0)							0 (0)	0 (0)					2 (2)	1 (1)			1 (1)						11 (11)		
	男女	2 (2)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	4 (4)	0 (0)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (2)	6 (6)	5 (5)	0 (0)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	13 (6)	3 (3)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	4 (4)	0 (0)	1 (1)	24 (12)		
	男女	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	4 (4)	5 (5)	1 (1)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		17 (17)		
	男女	2 (2)	3 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	5 (4)	0 (0)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	3 (2)	8 (6)	7 (7)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	2 (2)	17 (8)	5 (2)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)		41 (41)		
学 部 計	現代教育	男女	23 (12)	28 (15)	3 (2)	4 (2)	0 (0)	58 (31)	9 (4)	9 (3)	4 (3)	0 (0)	0 (0)	22 (10)	80 (41)	13 (6)	0 (0)	13 (6)	0 (0)	5 (3)	31 (15)	8 (4)	2 (1)	0 (0)	12 (6)	0 (0)	0 (0)	3 (1)	126 (63)			
	国語教育	男女	27 (6)	19 (8)	0 (0)	9 (3)	3 (1)	58 (27)	13 (4)	2 (1)	2 (2)	2 (2)	1 (1)	22 (3)	80 (20)	11 (5)	0 (0)	19 (2)	0 (0)	3 (3)	38 (18)	13 (6)	2 (1)	0 (0)	24 (12)	0 (0)	1 (1)	3 (1)	147 (73)			
	英語教育	男女	50 (18)	47 (23)	3 (2)	13 (5)	3 (1)	116 (48)	22 (4)	11 (5)	6 (4)	2 (2)	2 (2)	1 (1)	44 (13)	160 (61)	24 (12)	0 (0)	32 (2)	0 (0)	3 (3)	69 (34)	21 (10)	4 (2)	1 (1)	36 (18)	0 (0)	1 (1)	6 (3)	273 (136)		
	社会科教育	男女	3 (1)	1 (1)	5 (3)		9 (5)	9 (5)		2 (1)				2 (1)	11 (5)	2 (2)	3 (3)	1 (1)		2 (2)	8 (4)				1 (1)	3 (3)	2 (1)	1 (1)	26 (13)			
	数学教育	男女	4 (3)	2 (1)	1 (1)		7 (5)	7 (5)						0 (0)	7 (5)	1 (1)	2 (2)	4 (4)												18 (18)		
	理科教育	男女	7 (4)	3 (2)	6 (4)	0 (0)	16 (10)	16 (10)	0 (0)	2 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	24 (10)	18 (9)	3 (3)	2 (2)	5 (5)	0 (0)	2 (2)	18 (9)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	4 (4)	0 (0)	2 (2)	1 (1)	44 (22)			
	音楽教育	男女	26 (13)	29 (16)	8 (5)	4 (2)	67 (36)	9 (4)	9 (3)	6 (3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	24 (10)	91 (46)	15 (7)	0 (0)	7 (7)	39 (19)	8 (4)	3 (3)	2 (1)	0 (0)	13 (6)	3 (3)	0 (0)	2 (2)	4 (4)	152 (76)			
	図画工作・美術教育	男女	31 (9)	21 (9)	1 (1)	9 (3)	3 (1)	65 (22)	13 (4)	2 (2)	2 (2)	2 (2)	1 (1)	22 (3)	87 (25)	12 (6)	22 (11)	6 (3)	3 (3)	48 (24)	13 (6)	8 (4)	2 (1)	0 (0)	24 (12)	1 (1)	1 (1)	3 (1)	165 (82)			
	保健体育	男女	57 (22)	50 (25)	9 (6)	13 (5)	3 (1)	132 (58)	22 (4)	11 (5)	8 (4)	2 (2)	2 (2)	1 (1)	46 (13)	178 (70)	27 (13)	38 (19)	7 (7)	0 (0)	3 (3)	108 (54)	21 (11)	4 (2)	1 (1)	0 (0)	37 (18)	4 (2)	1 (1)	3 (1)	317 (158)	
	合 計	現代教育	男女	23 (12)	28 (15)	3 (2)	4 (2)	0 (0)	58 (31)	9 (4)	9 (3)	4 (3)	0 (0)	0 (0)	22 (10)	80 (41)	13 (6)	0 (0)	13 (6)	0 (0)	5 (3)	31 (15)	8 (4)	2 (1)	0 (0)	12 (6)	0 (0)	0 (0)	3 (1)	126 (63)		
国語教育		男女	27 (6)	19 (8)	0 (0)	9 (3)	3 (1)	58 (27)	13 (4)	2 (1)	2 (2)	2 (2)	1 (1)	22 (3)	80 (20)	11 (5)	0 (0)	19 (2)	0 (0)	3 (3)	38 (18)	13 (6)	2 (1)	0 (0)	24 (12)	0 (0)	1 (1)	3 (1)	147 (73)			

(注) () は臨探で内数、○は外国人留学生で内数

就職率(学部)(進学者を除く) 96.624%
教員就職率(学部)(進学者を除く) 67.511%
教員養成課程卒業生に対する教員就職率 65.517%

信州大学教育学部同窓会
第30回通常総会及び
創立30周年記念式典日程
(通知)

日 時
平成29年8月11日(金 祝)
午後1時より
会 場
長野市県町「ホテル国際21」
日 程
11:00～12:00
「信州大学教育学部同窓会
赤煉瓦館」の見学(希望者)
12:30～13:00
受付
(ホテル国際21「芙蓉の間」)
13:00～13:40
第30回通常総会
13:45～14:45
創立30周年記念式典
15:00～16:30
記念講演会
【講師】
原 晋氏
(青山学院大学陸上競技部監督)
【演題】
『箱根駅伝』から学ぶ
成長するための秘訣』
17:00～19:00
祝賀会(別室にて)



記念講演のご案内(一般公開)

演題

『箱根駅伝』から学ぶ
成長するための秘訣』
講師 原 晋氏

【プロフィール】

広島県三原市出身。
中学から陸上を始め進学した世羅高校3年時の1984年
主将として全国高校駅伝2位に貢献(優勝:報徳学園)。世羅
高校OBが監督を務めていた中京大学に進学し3年時に日本

インカレ5000メートル3位。1989年、郷里の中国電力
に入社し中国電力陸上競技部1期生として部創設に参加。

1993年には主将として全日本実業団駅伝初出場に貢
献。しかし1年目に故障し5年目の1995年、27歳で引退。
選手生活を終え、その後10年間、中国電力でサラリーマン生
活を送る。箱根駅伝の出走経験や出場校OBではなかったが
36歳のとき、母校・世羅高校の関係者から誘われ2004年、
青山学院大学陸上競技部監督に就任。第85回(2009年)
記念大会に於いて、史上最大のブランクとなる33年ぶりに
同陸上部を箱根駅伝出場に導く。第86回(2010年)大会
では8位に躍進させ、41年ぶりのシード権獲得をもたらす。
2012年の出雲駅伝で「大学三大駅伝」初優勝。2014
年全日本大学駅伝3位。2015年第91回箱根駅伝で初の総
合優勝に導き、2016年第92回箱根駅伝では39年ぶりの完
全優勝を果たす。今年の箱根駅伝でも総合優勝を果たし、3
連覇を成し遂げた。出雲選抜駅伝優勝、全日本駅伝優勝を加
え、平成28年度大学駅伝3冠に輝いた。

著書:

・魔法をかけるアオガク「箱根駅伝」制覇までの4000日(講談社)
・逆転のメソッド 箱根駅伝もビジネスも一緒です(祥伝社新書)

事務局からのお願い

記念講演終了後、「ホテル国際21」において祝賀懇親会(会
費六、〇〇〇円)を開催します。
こちらへも多数ご参加くださいますようお願い申し上げます。
申し込みは同封の葉書で事務局までお願いいたします。

○同窓会ホームページをご覧ください。

事業の紹介や同窓会報のバックナンバー等を閲覧す
ることが出来ます。信州大学教育学部 同窓会 で検索、
または、以下のURLをご指定ください。
<http://www.shinshu-u.ac.jp/group/education-alumni/>

○研究補助受付中

研究補助申請を四月より受け付けております。詳細
は同窓会ホームページをご覧ください。また、本号の十
ページ「同窓会情報の欄」をご参照ください。昨年度の助
成交付の研究テーマなどが掲載されております。

○住所変更をお忘れなく

転居の際には住所変更の届
を事務局宛てにお願い致しま
す。メールでも結構です。

○会費の二重払いについて

同窓会費の二重払いに注意
してください。同窓会費は終
身会費です。未納者には、後
日、納入願いの書面が届きま
す。二重払いの場合にはお返し
しますが、振り込み手数料等
がかかりますので全額返金は
できません。

事務局連絡先

電 話 026-238-4370
月・水・金 9:30～16:30
HP <http://www.shinshu-u.ac.jp/group/education-alumni/>
Email kdousou@shinshu-u.ac.jp